

保 存

‘関西都市連合’の形成

—自立と連携の新しい都市関係を目指して—

1991年2月

社団法人 関西経済同友会
都 市 問 題 委 員 会

目 次

要 旨	1
はじめに	7
基本認識 一 都市論から都市関係論へ	8
1. 都市を取り巻く環境の変化	8
① 価値観の変化	
② 都市の枠組みの変化	
2. 新しい型の都市関係	11
① 縦型階層構造への反省	
② 自立をベースにした都市の連携	
提言 一 ‘関西都市連合’の形成 自立と連携の新しい都市関係を目指して	13
1. 歴史から見た関西 一 都市自立の伝統	13
2. 自立しつつ連携する ‘関西都市連合’	14
① 各都市の自立 一 関西都市連合形成の前提として	
② 連携による効果	
3. ‘関西都市連合’の課題	18
① 関西の歴史を未来に	
② 人間中心の都市	
③ 活躍のステージを関西に	
④ 都市プランニングのあり方	
⑤ 都市連合のための交通インフラ	
4. ‘関西都市連合’形成のための仕組み 「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」の創設	22
終わりに	25
平成元年度・平成2年度都市問題委員会活動状況・名簿	26

要 旨

基本認識 — 都市論から都市関係論へ

(1) 都市を取り巻く環境の変化

「都市は新しい価値を生み出す苗床である」といわれる。しかし都市を取り巻く環境や、都市に住み、都市に働く人びとの価値観が、いま大きく変わろうとしている。

都市を取り巻く環境の中では、人びとのモビリティの高まりや都市機能の広域化などにより、個々の都市についての視点に加え、他の都市との関係を考慮することがますます重要になっている。さらには、情報化の進展、それに伴う経済・社会のグローバル化により、都市と都市とが国の枠組みを越えてダイレクトに世界の他の都市と関係する時代、複数の異質な価値が世界的にぶつかり合う時代も見えている。

人びとの価値観にも、「理性か感性か」「仕事か遊びか」「経済か文化か」「都市カリゾートか」といった、二者択一・対立の論理では対応できない新しい状況が生まれつつある。「文化に裏付けられた経済こそが次の時代を開く活力を持つ」という、経済と文化の関係に見られるような新しい融合関係の誕生である。対立概念の融合化、すなわち別種の両親から異なる形質を受け継ぐ新しい個体としての新種－ハイブリッド－が生まれるような、いわば「ハイブリッド的価値観」とでもいうべき価値観が現れてきた。

歴史を振り返っても、異質の文化の接触、対立概念のハイブリッドから新しい文化が生み出された例は数多いが、いまそのような接触や出会いがますます重要なものになろうとしている。

都市が新しい価値を生み出す苗床であるとすれば、その知的生産の原動力は、異質な価値の相互作用、異質な価値体系の激しい出会いに他ならない。異質な価値同士が排除し合うのではなく、お互いに自己主張を行いながらも相手の立場を認める寛容な精神、さらには異質な価値の出会いを新しい文化創造に積極的に活かしてゆく発想が大切である。

関西は古くから様々な海外の文化を受け入れ、その時代に応じて都市ごとに固有な文化を育み展開しつつ発展を遂げてきた。いわば歴史的に異質な価値をハイブリッドしてきた

伝統を持つ。

しかも現在も京都、大阪、神戸は至近の距離にありながら、他に依存することなく独立する大都市として自立できるだけの力を有している。関西のように巨大な諸都市が異質な個性を保ちながら現在まで継続、存立している地域は、わが国はもとより世界にも例を見ない。これこそ関西の特質であり、新しい型の都市関係を考える上での大きなヒントとなる。

(2) 新しい型の都市関係

昨今、都市と都市との関係について連携の必要性・可能性を説く論議が盛んである。

しかし、例えば「首都圏改造計画」に見られる連合都市圏構想のように、都市の機能や役割分担の発想から都市相互の利害調整に重きを置くものが多く、縦型階層構造による中央のリーダーシップとそれに従う地方という図式が期待されているようである。

ところが利害調整を主体とした都市関係は、ともすれば各都市が持つ異質性、個性を殺し、ひいては新しい文化創造の芽をつむおそれがある。

都市を新しい価値を生み出す場とするためには、都市間の自由な競い合い、切磋琢磨が重要なのであり、各都市の自立を前提とする連携のあり方こそが、いま問われているといって良い。

自立は自己完結性を保ち、単独でも都市として十分機能しながら自らの個性を追及すること、いいかえれば、都市の魅力を高めることを意味する。連携は、個性と個性の出会い、あるいは異質の文化の出会いのネットワークであるといえる。

都市の自立と連携、それは一見矛盾する概念のようであるが、価値観そのものがハイブリッド化しつつあるいま、いがみ合いでも妥協でもない新しい都市の関係が必要であり、また実現が可能なのである。

(1) 関西都市連合の意義

「関西は一つ一つ」は、これまで関西のパワーアップの立場から弱点といわれてきた。

しかし、それぞれの都市がこれまで自立してきたからこそ多様な個性を育んできたのであり、異質な個性がこれ程近く共存している関西は、まさしく知的生産の絶好のフィールドとなりうる地域である。

このような資質を活かし、個性豊かな都市が自立を前提として連携する新しい都市関係を目指して‘関西都市連合’の形成を提言したい。

- ① 関西都市連合形成の前提条件は各都市がその個性を磨き、自らを高める努力をなすことである。自立した都市同士の競争による切磋琢磨と魅力向上の相乗効果として関西全体の対外的パワーが増大することとなり、関西のパイの拡大も期待できるのである。
- ② 都市が連携する意義は、各都市が自由に個性を伸ばし発展していくにあたって共通して直面する阻害要因を除去し、各都市の資質・資源を最大限活用するための力となる共有財産を形成することにある。連携により広域的な影響を与えるビッグプロジェクトが可能になるであろうし、問題意識を紐帯として瀬戸内・西日本等との柔軟な連携の広がり発展していくことも期待できる。

(2) 関西都市連合の課題

関西諸都市が自立しつつ連携する都市関係を形成し、共に発展していくためにはいくつかの課題がある。

① 関西の歴史を未来に

関西が有する歴史を未来に繋いでいく努力が重要である。特に、歴史というストックを現代のフローに活かす、いわば古いものに伝わる精神を現在の力に融合させるダイナミズムをいかに形成するかがそれぞれの都市の課題となる。さらに、各都市が有する歴史を関西全体の共有財産として、散在する歴史的資産のネットワーク化を図り

たい。

② 人間中心の都市

これからの社会では、潤い・ゆとりこそが活力の源泉になるであろうが、大都市と自然が近接して共存している関西は、人びとの生活に潤い・ゆとりを提供できる可能性に富む。都市と自然をネットワーク化し、人びとに多様な選択機会を与える豊かで包容力ある圏域を形成することが関西の大きな目標といえる。

③ 活躍のステージを関西に

関西には優れた人材を生む土壌があるが、人材を積極的に売り出すための大きな仕掛け、発信力あるステージが不足している。関西の多様性を武器にする意味で、関西全体で様々な活躍のステージを整備することも関西の連携の重要な課題である。

④ 都市プランニングのあり方

都市プランニングにおいては、地域の実情に応じたきめ細かい施策が必要であるが現実の制度は画一的に過ぎる側面がある。関西の諸都市はそれぞれに実効性ある独自の都市プランニングを先駆的に実践することを試みるべきである。その積み重ねが現行の制度を変えるうねりとなることが期待されるし、このような課題を各都市が共に議論していくことが関西都市連合を一つに繋ぐ契機となるだろう。

⑤ 都市連合のための交通インフラ

関西の都市が自立しつつ連携するための緊急の課題は、連携の基盤となる交通インフラの整備である。多様なチャンネルを有する信頼性高いマストランジットのネットワーク整備や、交通機関のインターフェイスの改善に各都市は共に取り組まなければならない。交通インフラは、異なる個性を持った都市間を繋ぎ、異質な価値の出会い・相互作用を促進する基盤として重要である。

(3) 「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」の創設

関西都市連合を円滑にかつ継続的に築いていくためには、その仕組みとしての対話の場が必要になる。それは単なる意見調整の場ではなく、各都市の独自性・自律性を尊重し、

個性をぶつけ合う摩擦と刺激の場であることが重要である。

本提言ではそのような仕組みの一例として、アーサー王が、騎士達に上下の別をつけず自由に意見をいい合えるようにするため、大理石の円卓“the Round Table”に座らせたという故事にならい、ここに、自由でかつ実効性ある連携のための仕組みとして「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」の創設を提案する。

これは、情報化社会委員会で既に提言されている「関西21世紀を考える会（仮称）」の趣旨を、都市問題の立場からサポートするサブセッションとして位置付けたい。

「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」は、単に広域行政の受け皿といったものではなく、行政組織からは独立した中立の存在として、行政の意思決定に影響を与えることのできる提言組織でなければならない。

このため、広く関西の有識者が参加して都市フィロソフィについて対話する場や、そこでの議論の成果を受けた具体的なプロジェクトを通じ、自立と連携のあり方を実践的に検討する場などを設置することが必要であろう。

その足掛かりとして、京都、大阪、神戸が中心となって発足準備委員会を組織することを検討したい。さらには、そうした組織の必要性について関西全体のコンセンサスを形成し都市連合のあり方を議論するため、「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）創設フォーラム」を開催することも併せて提案したい。

終わりに

最後に強調しておきたいのは、連携は関西のパワーアップだけを目標として行われるものではない。個性同士が衝突するところに新しい文化が生まれ、新しい価値が生まれることが期待されるからこそ連携が必要なのであり、結果として、これがパワーアップに結びついてくるのである。

関西が、異質な価値を共存させながら新しい都市の関係を築き、そこから新しい文化を創造するならば、そのこと自体世界に発信できる価値あるものといえるだろう。そしてこの関西都市連合は、わが国はもとより、世界における都市関係の新しいモデルとして豊かな示唆を与えることになると思われる。

（ 以 上 ）

提言

‘関西都市連合’の形成

- 自立と連携の新しい都市関係を目指して -

はじめに

都市問題委員会では、都市を新しい産業や文化、新しい生活スタイルを生み出す知的生産の場として捉えると共に、これからの都市を論じるためには、都市と都市との関係をより重視すべきであるとの立場から、関西の将来像についての検討を試みた。

関西については、その経済力向上のために直接的な対策を探る組織や提言が多く見受けられるが、本委員会では、関西の諸都市がそれぞれの個性をこれまで以上に大切にしながら連携し、多様な価値が共存できる新しい社会にふさわしい都市関係を形成することによって、新たな活力が生み出されるという立場を取っている。

すなわち関西諸都市の連携は、単に規模のメリットを追及することにその意義があるのではなく、むしろ社会の変化に対応するための必然のアプローチであると考えている。

本提言は、都市問題委員会における過去2年にわたる研究成果を取りまとめたものである。今後の都市のあり方を考える上で参考となれば幸いである。

1. 都市を取り巻く環境の変化

時代はいま、大きな転換点にさしかかっている。

世界に目を向ければ、ボーダーレス化の進展、東西冷戦構造の終結に伴う新しい世界秩序形成の動き、その一方で地球的規模の環境問題の顕在化など、これまでの発想の延長線上では掴み切れない変化の波にさらされている。また国内においても様々な分野・局面にわたって新たな課題が生じている。

ここではまず、今後の都市のあり方に大きな影響を及ぼすであろう要素として、価値観の変化や都市の枠組みの変化の状況を確認しておきたい。

① 価値観の変化

物の豊かさから心の豊かさへ

わが国は戦後急速な経済成長を遂げ、いまや経済大国とまでいわれるに至った。

この成長を支えてきたのは経済発展を第一義とする価値観であるが、ここきてその価値観に疑問が生じつつある。人は経済的充足だけでは豊かさを感じられず、精神的充足が実は大切であると認識され始めた。時間や空間の使い方、ゆとりや潤いのあるライフスタイルなど、心の豊かさにかかわることが盛んに議論されるようになったのも、まさしくこの現れである。

多様で異質な価値の共存を認める社会

いかなる価値であれ単一の価値を絶対視するのではなく、人びとがそれぞれ自分の物差しに従って行動し満足を得ることのできるような社会、すなわち多様で異質な価値の共存を認める社会こそが、心の豊かさを実現するための基礎条件ではないだろうか。

そして、生活や活動の場である都市において、いかにそうした豊かさを現実のものとし

ていくかが、これからの都市を考えるにあたっての重要な視点になってくる。

「ハイブリッド的価値観」

人びとの価値観にも、「理性か感性か」「仕事か遊びか」「経済か文化か」「都市カリゾートか」といった、二者択一・対立の論理では対応できない新しい状況が生まれつつある。「文化に裏付けられた経済こそが次の時代を開く活力を持つ」という、経済と文化の関係にみられるような新しい融合関係の誕生である。このような対立概念の融合化の動きを、別種の両親から異なる形質を受け継いだ新しい個体としての新種－ハイブリッド－が生まれるという生物学の用語を借りて「ハイブリッド的価値観」と呼んでみたい。

② 都市の枠組みの変化

人びとのモビリティの高まりと都市機能の広域化

都市問題においては、通常、行政区域をその枠組みとして論議が進められているが、都市の実態は必ずしもそれらの枠組みのみで対応できるものではない。

人びとの活動は行政区域の枠組みを越えてますます広範なものとなり、そのライフスタイルに応じて複数の都市を使い分けているのが実情である。

加えて、情報基盤の高度化やリニア新幹線などの交通の技術革新は、都市機能をさらに広域化していくだろう。

現代の都市問題への対応は、都市個別の視点のみでは限界があり、常に他都市との関係においてその姿を捉えざるを得ないのである。

都市と世界との繋がり拡大

社会のグローバル化は今後ともさらに進展し、人、物、金、情報は、これまでの世界秩序を構成してきた国家の枠組みを越えて、より一層自由に世界を往来することになるだろう。経済、文化の集積の単位であり様々な活動の拠点である都市は、ますます世界との繋

がりを深め、世界の表舞台に立たざるを得ないことになる。

都市が国の枠組みを越えてダイレクトに世界の他の都市と関係する傾向が強まることは確かである。

2. 新しい型の都市関係

都市を取り巻く様々な環境の変化を考えると、これからの都市を議論するには常に他の都市とのかかわりを考慮しなければならない。これからは都市論から都市関係論へと視野を広げることが重要になる。

これまでの都市の関係についての議論では、例えば「首都改造計画」の連合都市圏型構造に見られるように、どちらかといえば都市の連携を機能や役割分担の発想で捉え、都市相互の利害の調整に重きを置く傾向があったようである。

しかし、「はじめに」でも述べたように、社会の変化に対応する都市の関係をいま一度考え直してみるべき時期である。

① 縦型階層構造への反省

現在のわが国の繁栄をもたらした背景には、縦型階層構造による中央政府の強力なリーダーシップとそれに従う地方という図式があったといわれる。

これが効率的であったことは否めないが、例えば関西国際空港の全体構想実現の難航が示しているように、様々な場面で限界や新たな問題を引き起こしているということも指摘されている。

活力を保ちながら多様な価値が共存できる新しい社会を創造するには、中央が地方の個性、自律性を尊重するとともに、地方も、これまでのように中央を経由して他の地域との関係を結ぶといった形ではなく、中央と地方、地方と地方が互いに主体性をもって柔軟で対等な関係を結ぶあり方が今後重要になるだろう。

② 自立をベースにした都市の連携

これまでの都市関係論やネットワーク論が、都市間の利害調整・機能分担といった側面を重視してきたことは先に述べたが、利害調整を主体とした都市関係は、ともすれば各都市が持つ異質性、個性を殺し、ひいては新しい文化創造の芽をつむおそれがある。

都市を新しい価値を生み出す場とするためには、都市間の自由な競い合い、切磋琢磨が

重要なのであり、各都市の自立を前提とする連携のあり方こそが、いま問われているとい
って良い。

自立は自己完結性を保ち、単独でも都市として十分機能しながら自らの個性を追及する
こと、いいかえれば、都市の魅力を高めることを意味する。連携は、個性と個性の出会い、
あるいは異質の文化の出会いのネットワークであるといえる。

この自立と連携は一見矛盾する概念のようであるが、価値観そのものがハイブリッド化
しつつあるいまこそ、いがみ合いでも妥協でもない新しい都市の関係が見えてくるはずで
ある。

提言 - ‘関西都市連合’の形成

自立と連携の新しい都市関係を目指して

1. 歴史から見た関西 - 都市自立の伝統

関西、特に京都、大阪、滋賀、奈良はわが国の王朝の発祥の地、継承の地である。このため、関西は古くから国内はもとより国外からの人や文物が集散し、わが国の先進地を形成してきた。

江戸時代には国内が幕藩体制によって統一されたにもかかわらず、京都、大阪は領主を置かない幕府の直轄地であり、市民による都市自治の伝統が強い。また、中央の権力に対する自主独立と自由活達な精神が商工業を発達させた。

このように、関西は各都市が自立を基盤とした長い歴史と文化を持つ圏域である。

現代においても京都、大阪、神戸はそれぞれ至近の距離にありながら、他に依存することなく独立する大都市として自立できるだけの力を有している。

自立した都市が互いに近接している地域の例としては、ライン川流域のボン、ケルン、デュッセルドルフなどがあげられるが、これらの諸都市は同質性が高く規模も小さい。関西におけるように、巨大な諸都市が異質な個性を持ちながら現代まで継続、存立しているという地域は、わが国はもとより世界的にも例を見ない。これこそ関西の特質であり、新しい都市関係を考える上での大きなヒントといえるだろう。

2. 自立しつつ連携する ‘関西都市連合’

現在、関西の経済力は域内総生産の総額がカナダ一国に匹敵するほど巨大なものであり、現実に域内において強い経済的相互関係にある。一方、それぞれの都市は常にライバル意識を持ちながら様々な面で競い合っている。

このような特色を持つ関西は世界的にもユニークな圏域であるが、これをさらに増進・発展させ、個性豊かな都市が自由・対等に手を繋ぐ都市関係として‘関西都市連合’の形成を提案したい。

① 各都市の自立

- 関西都市連合形成の前提として

異質な価値の相互作用による新しい価値の創造

都市は新しい価値を生み出す苗床であるが、その知的生産の原動力は、異質な価値の相互作用、異質な価値の激しい出会いに他ならない。歴史を振り返っても、異質の文化の接触から新しい文化が生み出された例は数多い。

ニューヨークが世界最先端の文化発信基地になり得ているのも、都市を構成する人びとの多様性に負うところが大きいように、様々な異なる個性ある人びとの接触と相互作用にこそ新しい価値を創造する真の基盤がある。

以上の観点から、関西を21世紀に向けて新しい価値を生み出す場とするためには、まずそれぞれの都市が他に影響を与えることのできる固有の価値、いわゆる都市の個性を見直し、それをもって積極的に他の都市と摩擦・刺激し合うこと、それぞれに自立した都市が良い意味で競い合うこと、そうしたダイナミックな関係を築くことが肝要である。

各都市の持つ異質な文化の相互作用を通じて新たな文化を創り出すことこそが、関西都市連合の目標なのである。

「関西は一つ一つ」は関西の資産

関西はまた、実に大きな可能性を秘めている。

京都は千年の歴史に培われた審美眼・鑑識眼をベースに、常に時代の先端を切り開き、洗練された文化や先端的な技術を育んできた都市である。しかも、明治維新以後も琵琶湖疏水や水力発電所の建設、市電の敷設など革新的な発想による都市基盤整備が行われ、単なる歴史都市にとどまらない活力を有してきた。

● 現在の大阪は経済一辺倒との誤解を受けているが、その実、生活に根づいた進取の気風、渾然としたエネルギーの中から新しいアイデアを昇華させるパワー、そして何より自由でユーモア精神に富んだ独特の市民文化を育ててきた。また、懷徳堂や中之島公会堂への経済人の志、御堂筋に見られる時代を先取りした都市計画などは、大阪の精神を表す好例ではないか。

神戸は常に自己変革を遂げる大胆さを持つとともに、港文化特有のセンスを身に付けた都市であり、さらに奈良、滋賀、和歌山など、異質な個性がこれ程近接して共存している関西は、まさしく知的生産の絶好のフィールドとなり得る地域である。

「関西は一つ一つ」はこれまで関西のパワーアップの立場から弱点といわれてきたが、その関係はいまや関西の最大の資産になり得るのであり、それぞれの都市が自立してきたからこそ多様な個性を育んできた関西の歩みをいま一度評価したい。

都市それぞれの努力による魅力の向上

関西の各都市、なかんずく京都、大阪、神戸は一つ一つを取っても世界的な大都市であり、都市本来の機能を支えるソフトやハードについては、それぞれの都市が個別に努力し整備すべき課題といえる。

しかし、それぞれの都市がその歴史的背景、地理的・物理的条件、そして市民の価値観を反映し、都市の個性にふさわしいハードやソフトづくりを目指す時、単なる他都市の物真似ではないその都市独特の機能が整備され、そうすることによって各都市の魅力が増幅されるのではないだろうか。

加えて、自立した都市同士の競争による切磋琢磨と魅力向上の相乗効果として、関西全体の対外的パワーが増大することとなり、関西のパイを拡大する効果も期待できるのである。京都、大阪、神戸がそれぞれにコンベンションシティを目指し競争を行った結果、関西全体のコンベンション開催件数が著しく増加し、東京圏に匹敵するようになったのは端的な例である。

また、世界に対する情報発信力を高めることが関西の課題として指摘されてきたが、このためにもまず、関西の都市それぞれが強い個性に裏付けられた情報発信力を持つ必要があるといえる。

要するに、各々の都市の自らを高める努力が、都市間の連携を議論する前提だと考えるのである。

② 連携による効果

阻害要因の除去と共有財産の形成

都市それぞれが競争しながら発展する努力を行っていく過程で、都市は他の都市との関係を認識し、問題意識を共有していくことになる。

現代は自らの都市についての対処だけでは解決されない問題がますます増えつつある。滋賀から京都を経て大阪・兵庫へ流れる水資源利用と汚染の問題、廃棄物処理などはその端的な例であり、人びとのモビリティに係わる交通や情報についても同様だろう。

だからこそ関西都市連合においては、それぞれが自由に個性を発揮し発展していくにあたって、共通して直面する阻害要因の除去や、都市が持つ資質・資源を最大限活用できるようにするための力となる共有財産の形成を目指したいのである。

足し算を越えた飛躍

連携の意義は、その効果が複合的でありしかも相乗的であることだろう。何より、広域的な影響を与えるビッグプロジェクトが可能になる点大きい。

例えば大阪で行われた「花博」は、集客効果を中心にその影響は神戸、京都にも及んだし、日本万国博ではそれを契機として様々なインフラの整備が行われたと同時に、「千里」という新しい価値を生み出した。千里はいまや単なるニュータウンではなく、知の集積地として関西の共有財産に育っている。

さらには京都、大阪、奈良の連携の下に築かれつつある「関西文化学術研究都市」は、21世紀に向けての世界的情報発信基地であり、関西全体に計りしれないインパクトを与

えることが期待されている。

このように、それぞれの都市の力の結集により、単なる足し算ではない飛躍的な力の発揮が可能となる。巨大なポテンシャルを持ちながらそれが顕在化しなかった関西の構造を解きあかす鍵が、関西都市連合の形成にあるように思われる。

しかもこの連携の効果は、関西のみにとどまるものではなく、問題意識を紐帯として柔軟な広がりを持つことが期待できる。例えば瀬戸内圏はその歴史的経緯からいつでも関西とかかわりが深く一体ともいえる地域であるが、本四架橋を契機に関西との関係が再認識されている。また、現在議論されている第二国土軸構想もそうした広域での問題共有の現れであり、関西を含め西日本諸都市の発展を促すための具体的な事例といえるだろう。

3. ‘関西都市連合’の課題

関西の各都市は、以下に述べるような共通の課題に今後対処していく必要があると考えられる。これらの課題は、関西都市連合という新しい都市関係の中ではじめて解決の糸口が見い出せるものである。

① 関西の歴史を未来に

先に述べたように、関西の都市はそれぞれに長い歴史的背景を持っており、その結果有形無形の歴史的資産を今日に伝えている。しかし、これらを単に凍結保存するだけの観光資源にとどめるのではなく、各都市がそれぞれの歴史的アイデンティティをいま一度認識し、個性の拠り所とすると共に、都市づくりにおいてそうした歴史性をいかに反映していくかを考慮すべきである。

ここで強調したいのは、歴史というストックをフローに活かしていく努力である。

パリは歴史的資産の豊富な都市といわれるが、その本質は、常に自らを歴史的文脈の中に読み込み、その基盤の上に新しいものを創造していくダイナミズムであり、その成果の連続がパリの歴史を形成してきたのである。現在進行しているビッグ・プロジェクトも、まさに未来への歴史的資産づくりといって良い。

古いものに伝わる精神を読み取り、それを現在の力の中に融合していくことこそが、都市において歴史を議論する意義なのである。

加えて、各都市が有する歴史を関西の共有財産に高めるために、散在する歴史的資産を関西全体の歴史の中に位置付けその活用策を総合的に考える、いわば歴史的資産のネットワーク化が試みられるべきではないか。その結果、断片的な遺跡・伝承を超えた関西の歴史像が浮かび上がってくることになるだろう。

② 人間中心の都市

関西都市連合はその内においてそれぞれの都市の魅力向上を目指していくが、ここでい

う魅力こそ「人」とのかかわりにおいて論じられるものであり、改めて都市と人間との関係がクローズアップされる。

20世紀型の都市が、工業社会の論理において人をそのシステムの中に組み込み、都市自体の発展のために人を利用したある種苛酷な都市であったとすれば、21世紀の都市は、知の担い手である「人」が再評価される場、人間中心の都市であるべきだといえよう。

関西は、その域内に京都、大阪、神戸などの大都市を有しながら、多様で豊かな自然をもまた共存させている珍しい圏域である。六甲・金剛・生駒や鈴鹿の山系、琵琶湖、ひいては紀伊半島から瀬戸内にかけて様々な表情を持った自然に恵まれており、関東と比べた時、国立・国定公園の数の違いが関西の特色を良く物語っている。このように都市と自然が近接して共存している関西の構造は、いま述べた「人」の視点から見た時、まことに魅力的である。

この資質を積極的に活用するためには、大都市と自然に恵まれた地域とを分離して考えるのではなく、ハード・ソフトにわたって両者をネットワーク化していくことが肝要である。職・住・学・遊という多面的な機能を関西全体で広範に提供できる条件を整備することにより、人びとに多様な選択機会を与える豊かで包容力ある圏域が形成されるのである。

これこそ関西のポテンシャルを活かし人間中心の都市を築くため、関西が連携して取り組むにふさわしい課題である。

③ 活躍のステージを関西に

関西は、創造力豊かで優秀な人材をこれまで数多く生み出してきたし、今も豊富な人材が存在している。しかし一方で、それら人材が外部に流出している状況が懸念されているのは、ひとえに彼らが活躍するにふさわしい舞台・ステージがソフト・ハード共に不足していたことによるためだろう。

優れた人材を生む関西の土壌を活かし、さらには外部から人を引き付けてくるためにも、人材を積極的に売り出していく大きな仕掛け、いわば発信力あるステージを形成することを考えたい。関西全体で活躍の場を与え、関西の多様性を武器にするという意味でも、こうした仕掛けづくりは連携のあり方の良いヒントになるだろう。

ファッションを例にとれば、各都市はそれぞれのアイデンティティに基づいてファッション都市を標榜しているが、その競争関係は維持しさらに個性を伸ばすとともに、関西として世界的波及力を得ることができるような連携がいま求められている。

同時に各都市は、それら人材が暮らし、活動し、そして交流するための装置を備えておかねばならない。例えばそれは魅力ある都市の中核施設であり、文化施設であり、教育・研究施設やサロンなどであるだろうが、それらは各々の都市がその個性を背景に選択し整備すべきもの、すなわち各都市の自立のテーマであるといえる。

④ 都市プランニングのあり方

各都市がその個性を最大限発揮するにあたって、都市プランニングにかかわる現在の制度そのものが足枷になるという状況がある。例えば京都や奈良においては、歴史文化資源の保存と開発のバランスが重大な問題であるが、大阪においては産業構造の転換によって生じた大規模な遊休地（鉄道の操車場、港湾地区の倉庫群等）の再利用・活性化も見落とせない問題である。このように、各都市が抱える課題は様々に異なるのであり、全国一律の発想では個性ある都市づくりは難しい。都市プランニングにおいては地域の特性に応じたきめ細かい施策が必要であり、都市計画関連法規などについては市町村レベルに大幅な権限委譲があつてこそ、規制と緩和の柔軟なバランスが可能になるだろう。一方ベイエリア構想などのように、地域の独自性を発揮しつつも複数の府県や市町村が一体となって推進すべき広域的プロジェクトに対応する新しい法制度などの工夫も重要である。

かつてある時期、大阪が全国の都市プランニングを先導していた歴史を省みると、関西の諸都市はそれぞれに実効性ある独自の都市プランニングを試みるべきであり、関西において先駆的な事例を積み上げていけば、その連鎖と波及効果が現行の制度を変える一つのうねりになるだろう。

さらには、こうした課題を各都市が共に議論していくことにより、都市のありようについての共通認識、いわば関西都市連合を一つに繋ぐ契機が生まれることも期待できる。

都市プランニングについての議論は都市の自立のテーマであると共に、連携のテーマと

しても重要である。

⑤ 都市連合のための交通インフラ

関西各都市が自立しながら連携していくための緊急の課題は、連携の基盤となる交通インフラの整備である。

これまでの都市交通は、総合交通体系を目標としながらも、結果的には各交通機関が独自の整備を進めてきたために非効率を生じている一面がある。例えば、より自由度の高い高品質のサービスへのニーズから自動車への選択が強まり、道路の整備が重点的に進められてきたものの、物理的な限界から既に対応が困難となり、環境問題も加わって自動車交通そのものが社会的な問題となりつつさえある。

そこで、関西各都市がより緊密に連携していくためには、多様なチャンネルを有する信頼性の高いマストランジットのネットワーク整備が不可欠となる。自動車か鉄道かというトレード・オフ的発想を離れ、鉄道を主とするマストランジットの再評価を行い、既存の鉄道のサービスをより高めた上で自動車と鉄道のバランスを図り、都市交通の選択性と信頼性を向上させることが、魅力ある都市づくりの基礎条件といえる。

鉄道における新路線の建設や、高速道路網の充実と共に、既存の交通機関をベースにして快適性・利便性・選択性などを高める工夫も図らねばならない。例えば、交通機関の接続、インターフェイスの改善である。異種の交通機関や事業主体の異なる鉄道間の接続などは、利便性・快適性向上の側面から今後ますます重要になるだろう。

異なる個性を持った都市間を繋ぎ、異質な価値の出会い・相互作用を促進する意味からも、都市間ネットワークの基礎となる交通インフラの整備は、関西都市連合の主要な課題といえる。

4. ‘関西都市連合’ 形成のための仕組み

「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」の創設

関西の各都市が、自立しつつ連携する都市連合を円滑にそして継続的に築いていくためには、そのための仕組みが必要になる。それは取りも直さず「対話の場」づくりだろう。

現実には近畿ブロック知事会議、近畿開発促進協議会などの行政上の広域的意見調整の場や、その他の各種協議会・委員会等があり、都市間の対話については様々な努力が行われている。ただここでの狙いとして強調したいことは、都市の自立を前提とした実質的な討議の場であり、セレモニーや意見調整よりもむしろ、活発な議論の場づくりにある。なぜなら、都市関係を協調（調整）の側面で捉えてはダイナミックな発想の飛躍は期待しにくく、最大公約数的な意見の収斂が、関西全体にとってかならずしも最良の解答になるには限らないからである。

アーサー王が、騎士達に上下の別をつけず自由に意見をいい合えるようにするため、大理石の円卓“the Round Table”に座らせたという故事にならい、ここに、自由でかつ実効性ある連携のための仕組みとして「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」の創設を提案する。

これは、情報化社会委員会で既に提言されている「関西21世紀を考える会（仮称）」の趣旨を、都市問題の立場からサポートするサブセッションとして位置付けたい。

ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）の位置付け

「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」は、道州制や府県連合といった広域行政のための受け皿になるべきものではない。

あくまでも既存の制度の中で構成されるゆるやかな連携のための仕組みであり、本来の目的であるホットな議論の場として機能するためにも、行政組織から独立した中立の存在であることが重要である。

ただし、行政担当者とは発想や洞察にかかわる面において大いに交流し、その意思決定に対して影響を与えることのできる提言組織として位置付けたい。

すなわち、「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」において議論された成果は関西の総意として示され、関係行政はそれを念頭に置いて施策を検討することが期待される。

ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）の機能

「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」においては、まず都市についての基本認識あるいは想いといったものをそれぞれの都市が持ち寄り議論したい。

大阪はどうありたいのか、京都、神戸は何を問題とするのか、ビッグプロジェクト以前の、都市にかかわる地道な認識についての対話を継続する中から、関西全体についての共通のスタンス、それはグランドデザインといった規範的なものではなく、フィロソフィ、すなわち高い志と深い想いが生み出されるはずである。これこそが全体をゆるやかに繋ぎとめる糸として、関西都市連合の大切な資産になるだろう。

そのための組織として「フィロソフィ委員会」を内部に設置する。ここには関西の各都市から行政、経済界、文化・学術など様々な分野の有識者が参加すると共に、特にそのトップは日本ひいては世界において認められる学識を持った第三者に依頼し、中立的であるとともに影響力・発信力ある組織としたい。

さらに、フィロソフィ委員会の成果を受けて、プロジェクトオリエンテッドな議論を行い、自立をベースとした連携のあり方を具体的に検討する組織として「プロジェクト委員会」を適宜設置する。

関西の各都市、なかんずく京都、大阪、神戸などは各個に大きなプロジェクトを実施できる地力を持つてはいるが、あえて、関西の力を結集しなければ実現できないスケールの大きなプロジェクトを関西の課題として提示し、いわば自らに負荷をかけることによって連携への力とするのである。

一方、そのプロジェクトの中でそれぞれの都市は、自らの都市をどう位置付けそこから何を得るのかを探り、これを通じて都市の自立を促すことにもなる。

なお、「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」における議論は、必要に応じて外部に公表していくようにしたい。

密室化を防ぎ会議を活性化するためにその議論の過程を示し、広聴会等の機会を通じ公けにしていけることが望まれる。それは提言そのものへのコンセンサス形成を円滑にするためにも有効である。

関西の課題を表明することにより各都市の問題意識を高めると共に、関西都市連合とい

う枠組みで外へ向けての発信力を強化しなければならない。

ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）発足準備委員会

そしてその足掛かりとして、例えば京都、大阪、神戸が中心となって「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）発足準備委員会」を作ることを提案したい。

都市の抱える問題が多様なように、都市関係についての視点もまた様々に異なるわけであり、まずそうした意識をぶつけ合い、関西の各都市が連携する必要があるという合意を得た上で、「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）」のあり方、組織づくり、運営の仕方などが検討されるべきだろう。そのために、準備委員会主催の「ラウンドテーブル関西都市連合（仮称）創設フォーラム」を定期的に関西の行政、経済界を通じたコンセンサス形成を図っていくことも一つの案である。

終わりに

情報化の進展、それに伴う経済、社会のグローバル化はある意味で、複数の異質な価値が世界的にぶつかり合う時代の到来ともいえる。

このような状況にあつて大切なことは、異質な価値同士が排除し合うのではなく、お互いに自己主張を行いながらも相手の立場を認める寛容な精神、さらには、異質な価値の出会いを新しい文化創造に積極的に活かしていく発想だろう。

関西は古くから様々な海外文化を受け入れ、その時代に応じて都市ごとに固有な文化として展開しつつ発展を遂げてきた。いわば歴史的に異質な価値をハイブリッドしてきた伝統を持つのである。

いま改めてそうした精神を都市と都市との関係において受け継ぎ、異質な価値を共存させ、それらの切磋琢磨の成果として新しい文化を創造しようとする関西都市連合の形成を提言した。関西においてこのような新しい都市関係を築くこと自体が、世界に発信できる価値あるものといえるだろう。そしてこの関西都市連合は、わが国はもとより世界における都市関係の新しいモデルとして豊かな示唆を与えることになると思われる。

以 上

平成元年度 都市問題委員会活動状況

- 5月19日 正副委員長会議「本年度の活動方針について」
- 6月 2日 スタッフ会「本年度の活動の進め方について」
- 6月28日 スタッフ会「本年度の活動の進め方について」
- 7月24日 常任委員会「本年度の活動の進め方について」
- 8月 1日 講演会・常任委員会・正副委員長晚餐懇談会
「新しい関西を考える」
講 師 通 商 産 業 省
工業技術院国際研究協力課長 八 幡 和 郎 氏
- 8月10日 講演会
「大阪への具体的提案 ― 中之島東部地区を中心に ―」
講 師 建 築 家 安 藤 忠 雄 氏
※ 安藤忠雄さんの受賞を祝う会
- 9月 6日 講演会・常任委員会（交通問題委員会と共催）
「関西の鉄道交通体系 ― 運輸政策審議会の答申を中心に ―」
講 師 運 輸 省
近畿運輸局企画部長 馬 場 耕 一 氏
- 9月13日 ※ 安藤忠雄氏建築展 鑑賞会（於：大阪ナビオ美術館）
- 11月13日 講演会・常任委員会・正副委員長晚餐懇談会
「都市景観と合意形成」
講 師 大 阪 大 学
工学部環境工学科教授 笹 田 剛 史 氏
- 12月18日 講演会・常任委員会（交通問題委員会と共催）
「ライフスタイルの変化とこれからの人流・物流」
講 師 神 戸 大 学 経営学部教授 田 村 正 紀 氏
- 12月22日 ※ 安藤忠雄氏設計によるライカ本社ビル視察（於：大阪南港）
- 12月25日 講演会・常任委員会
「大阪市 新総合計画草案の基本的な考え方について」
講 師 大 阪 市 市長室理事 八 木 勇 氏

平成 2 年

- 2月 6日 講演会・常任委員会
「これからのわが国における関西の役割」
講 師 国 土 庁 大都市圏整備局長 三 木 克 彦 氏
- 2月20日 講演会・常任委員会
「世界都市 関西（KANSAI）－大阪の役割を考える－」
講 師 大 阪 府 副 知 事 西 村 壮 一 氏
- 4月 4日 常任委員会
「本年度活動内容の報告ならびに今後の活動方針について」
- 4月12日 講演会（文化と経済委員会と共催）
「ヨーロッパ事情」
講 師 作 家 塩 野 七 生 氏

※は、本委員会が中心となり、関西経済同友会メンバーを参加対象としたもの

平成2年度 都市問題委員会活動状況

- 5月 7日 正副委員長会議「本年度活動方針について」
- 5月28日 スタッフ会「運営方針について」
- 6月 7日 スタッフ会「運営方針について」
- 6月26日 スタッフ会「研究レポート案検討」
- 7月24日 スタッフ会「研究レポート案検討」
- 7月26日 常任委員会「研究レポート案検討」
- 8月21日 スタッフ会「研究レポート案検討」
- 10月 1日 常任委員会「提言スケルトン案検討」
- 10月 9日 スタッフ会「提言スケルトン案検討」
- 10月25日 東京視察旅行（フロンティア・フォーラム、情報化社会委員会
～26日 交通問題委員会と共催）
- 10月29日 常任委員会「関西のポテンシャルについて考える」
- 11月 7日 常任委員会「提言スケルトン案検討」
- 11月19日 スタッフ会「提言スケルトン修正案検討」
- 11月21日 常任委員会「提言「関西都市連合」の形成
－21世紀の都市圏モデルを目指して－」（文章化）
- 11月29日 講演会・常任委員会（フロンティア・フォーラムと共催）
「都市の再生と大学の役割
－シカゴ地域におけるノースウェスタン大学－」
講 師 ノースウェスタン大学
工学部学長 ジェローム B. コーエン 氏
- 12月20日 正副委員長会議
「提言「関西都市連合」の形成－21世紀の都市圏モデルを
目指して－」（案）とりまとめについて」

平成 3 年

1 月 2 9 日

常 任 委 員 会

「提言「‘関西都市連合’の形成 - 21 世紀の都市圏モデルを
目指して-」（案）とりまとめについて」

2 月 7 日

常 任 委 員 会

「提言「‘関西都市連合’の形成 - 自立と連携の新しい都市関係
を目指して-」（案）とりまとめについて」

2 月 2 5 日

提言「‘関西都市連合’の形成

- 自立と連携の新しい都市関係を目指して-」（案）

を幹事会にて発表

3 月 1 1 日

提言「‘関西都市連合’の形成

- 自立と連携の新しい都市関係を目指して-」

を記者発表

平成2年度 都市問題委員会常任委員会名簿

(敬称略・順不同)

委員長	井上和夫	近畿日本鉄道	常務
副委員長	湯浅叡子	千里文化財団	専務理事
〃	吉山文雄	関西国際空港ビルディング	副社長
〃	大辻真喜夫	竹中工務店	取締役
〃	コシノヒロコ	ヒロコ・コシノインターナショナル	会長
〃	小松健男	ロイヤルホテル	社長
〃	南谷昌二郎	西日本旅客鉄道	常務
常任委員	秋山喜久	関西電力	副社長
	浅井栄一	エー・エー・ピー	社長
	安藤忠雄	安藤忠雄建築研究所	社長
	井筒邦雄	大阪ガス	取締役
	上敏郎	日本電通建設	社長
	岡本行善	昭和設計	社長
	河合慎一郎	住信基礎研究所	常務
	川岸泰典	同和火災海上保険	専務
	黒田昌宏	サングローバル	社長
	小泉純	小泉産業	社長
	佐々木英彰	住友電工ハイテックス	会長
	澤一寛	日本カラーテクノロジー研究所	社長
	篠崎由紀子	都市生活研究所	社長
	菅井英子	デコ・ジャパン	代表取締役
	高畠康雄	鴻池運輸	専務
	徳岡昌克	徳岡昌克建築設計事務所	社長
	中垣久司	ヤマハ	大阪支店長
	中村俊雄	長谷工コーポレーション	専務
	仁尾隆俊	西洋環境開発	専務
	布谷勇之	布谷	社長
	能村龍太郎	太陽工業	会長
	橋本亨	電通	マーケティング局長
	古川深志	丸紅	大阪業務部長
	降旗毅	東急不動産	常務・関西支社長
	松下鎮	大阪ガス	経営調査部長
	松田英三郎	阪急百貨店	常務
	村井照夫	南海電気鉄道	専務
	山下健一	大林組	取締役
	吉田時雄	大阪新聞社	会長
	吉野国夫	ダン計画研究所	社長
	渡辺泰寛	住友生命保険	監査役

足立伸之助
白川正彰
宇治日出二郎
橋本健一
西山純一
黒坂保巳
藤岡繁樹
萩尾千里
梅名義昭
井上仁

近畿日本鉄道
近畿日本鉄道
千里文化財団
竹中工務店
ヒロコ・コシノ
デザインオフィス
ロイヤルホテル
西日本旅客鉄道
関西経済同友会
関西経済同友会
関西経済同友会

広報室部長
企画室
事業部部長
開発計画本部課長
顧問
企画部部長代理
総合企画本部
投資計画室副室長
常任幹事
事務局長
企画調査課長
企画調査課
主任研究員

‘関西都市連合’の形成
- 自立と連携の新しい都市関係を目指して -

平成3年2月25日発行

発行者 社団法人 関西経済同友会

常任幹事 萩 尾 千 里
事務局長

大阪市北区中之島6丁目2番27号

電話 (06) 441-1031

印刷所 工房ムーゼン

大阪府箕面市桜井1-1-3
